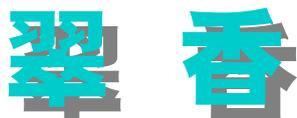




浜田水産高校「同窓会」



〒697-0051

浜田市瀬戸ヶ島町25-3

TEL 0855-22-3098 Fax 0855-23-4811

E-mail hamasui-01@shimanet.ed.jp

HP http://www.shimanet.jp/hamasui/

携帯HP http://www.shimanet.jp/hamasui/keitai/

会長挨拶

浜水会会長 山崎 晃

会員の皆様におかれましては、全国各地で日々ご活躍のこととお喜び申し上げます。平素は、母校及び同窓会「浜水会」の発展のため物心両面のご高配を頂き厚く御礼を申し上げます。

私は、平成20年9月に第4代目の会長に就任しました。就任に当たり4つの目標を立てました。そして、①会員名簿の発行②広島支部の再度の設立③翠香の会報の発行を実現してきました。4つ目の浜水会単独総会の開催につきましては、今秋開催する計画で第1回の代表委員会を開催して準備を進めているところです。目標としては、約200名の参加を予定して開催したいと思っています。

平成24年度の事業で作製した校歌と応援歌のCDの販売に私自身取り組んでおり、現在150枚販売しております。卒業生の皆さんも販売にご協力よろしくお願い申し上げます。

平成25年度は、松江支部の再度の立ち上げに取り組まれました。11月16日(土)サンラポーむらくもで、浜水会松江支部総会が開催されました。池田速人校長と佐々木幸治事務局長と私の3名が出席しました。支部長に佐々木宣義(10E)様が就任されました。総会資料によると会員数は43名おられ、卒業生13名と旧職員船江昭光先生・野村みさこ(青木)先生・本部からの3名の18名で盛会に開催されました。

平成26年度は、大田支部の設立に向けて取り組みたいと思っています。これまで邇摩支部があり、支部長として長年ご尽力を頂いておりました野木久雄様(1期漁業科)が2月27日に邇摩町の自宅にて83歳でご逝去されました。「支部を何とかしたい」と言っておられた野木様のご生前中に、支部の立ち上げが出来なかったことが残念でなりません。

母校を取り巻く状況は、少子高齢化の影響により、高校入試での定員確保が最大の課題となっており、募集定員の確保も毎年厳しくなっています。そのような中で生徒達は、水産業の担い手育成事業で取り組んだ事業を継続しております。食品流通科では、うちわエビやブリの血合肉を使った新商品作りに頑張っています。特に「地食甲子園 in はまだ2013」ではトビウオを利用した fly,fry ドッグを発表し、ハイクオリティー賞を受賞しました。海洋技術科では、フリー配偶体を利用したワカメ養殖、植林活動や水中ロボットを利用して沖合人工漁礁の調査等を行い、その成果を南部地区水産教育研究大会で発表し、奨

励賞を受賞しました。

3月1日(土)の卒業式に参列しました。今春の卒業生は51名であり、県内就職が30名(59%)、県外就職は5名(10%)・県内進学が13名(25%)、県外進学1名(2%)、その他が2名となっています。就職者のうち地元就職者は85%にもなります。漁業後継者は、吉勝漁業、裕丸漁業生産組合に3名です。専攻科修了生は、8名で島根県船舶職員・大島商船高等専門学校練習船の公務に2名、佐藤國汽船・ダイトーコーポレーション・神原ロジスティクスの内航海運業に4名、石油備蓄基地管理船に1名、三隅火力発電タグに1名と聞いております。

新入生の応募状況は、海洋技術科が32名、食品流通科が24名の56名と聞いております。定員の80名の確保のために、職員や卒業生の頑張りが必要だと思います。

関西浜水会は、阪神大震災後に、2府5県で設立されました。早いもので、10月に20周年記念を迎えることになり、盛大に総会・懇親会が開催される予定になっています。

終わりに、浜田水産高校の益々の発展と会員の皆様のご多幸とご健勝を祈念いたしますと共に浜水会の発展のため一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い致します。

地域と共に活力ある浜水を目指して

学校長 池田 速人



会員の皆様には、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。平素より本校教育活動に対しまして、ご理解とご支援を賜り厚く御礼申し上げます。

平成25年4月、浜田水産高校第29代校長を拝命しました池田速人と申し上げます。本来ならば、皆様には年度当初にご挨拶を申し上げるべきでしたが、浜田水産高校同窓会「浜水会」会報、翠香第15号の発刊に合わせ、遅ればせながら挨拶に代えさせていただきます。前任の秋好校長先生同様、引き続き皆様のご指導とご協力のほど切にお願いいたします。

3月1日の卒業・修了式では本科生51名、専攻科生8名がこの瀬戸ヶ島の学舎を巣立ち、新たに同窓会の会員となりました。先輩諸兄の暖かいご支援をお願いいたします。本校ではここ数年来「地域と共に活力ある浜水」を目指し、地域を支える人材の育成を目標に各種の取組を続けてきたことは、皆様ご承知のとおりです。今年度も卒業生の85%が地元企業へと就職しました。中でも、地元巻き網を中心に3名の漁業後継者就業があったことは全国的にも

特筆すべき数字です。関西及び広島を中心とした山陽側でご活躍されている同窓の皆様にとってはいささか寂しい事のように思われるかもしれませんが、少子高齢化と人口減の中にあつて、本校の存続をかけた戦略的な地域定住と地域を支える人材育成への取組は、水産都市浜田市はもとより島根県にとっても大きな意味を持っていると確信しています。本校は今後も地域と共に活力ある浜水を目指して進んでまいります。同窓の皆様の協力をお願いいたします。

さて、学校施設設備の整備状況です。今年度は大型水産練習船「神海丸」699トンの竣工をはじめとして、艇庫の改修、海洋技術科棟のトイレ改修、食品流通科実習棟の全面改修と缶詰巻き締め機の更新やレトルトパウチ殺菌装置の新規導入工事が行われています。平成26年6月末に完成を目指して、定員を32名とする寄宿舎の増築工事も着手しました。来年度には本館棟の改修工事も行われます。財政難の折、本校では存続に向けて、着々と施設設備の充実が図られていると言っても過言ではありません。

結びにあたり、作家の内田たつるさんが、新聞のコラムに書かれた文章に「学校や教師の役割は卒業生にとっての母校であり続けることである。遠く、暗い海を航海している時、ふっと振り返ると、遠くに母校の光が見える。それが、卒業生達を励まし、勇気づける。」とありました。私も全く同じ思いでいます。その意味で、改めて学校や教師は変わることなく灯をともし続けて行かなければとの思いを新たにしているところです。今後も永遠に浜田水産高校の灯りをともし続けていくために、何とぞ同窓会「浜水会」会員の皆様のご協力をお願いいたします。



平成25年度
浜水会 役員会



日時・場所

平成25年6月29日
(土) 10時00分～

12時10分 浜田水産高校 会議室

議題

- ①平成24年度 事業・決算報告 承認
- ②平成25年度 予算・事業計画 承認
- ③CDの購入について
できるだけ、役員会、総会、同窓会開催時に購入を呼びかける。
卒業時に生徒に購入してもらおう。
- ④同窓会会費について
同窓会支部活動の支援、生徒数の減少による会費の減少、卒業生へのCD配布などで活動費の

捻出が困難な状況になってきたので入会金、終身会費、名簿代等の合計金額を21年度までの会費額に変更する。

⑤平成26年度総会について

総会・懇親会を行う方向で準備する。
開催については役員や評議員などを通じて会員への周知を図る。

⑥『翠香』原稿について

役員に原稿を書いてもらいたい。26年2月末までに寄稿いただくと15号に掲載できる。

出席者

会長 山崎 晃 (12 F) 副会長 中村洋一 (15 F)
顧問 池田速人 (校長) 顧問 吉中克吉 (3 F)
監査 三浦智富 (14 F)・下谷輝幸 (14 P)

【理事】

佐々木宣義 (10E) 藤本喬士 (10E) 永見志郎 (11P)
吉田千昭 (12F) 松山康明 (15P) 前 滋 (16P)
田中輝隆 (17P) 榊原 等 (19E) 岩川 清 (19P)
米谷 靖夫 (24F) 中村 實 (25F) 中村公一 (28F)
千代延 英信 (38P) 山崎 淳 (42F) 木原一尊 (50K)
事務局 (佐々木・山本)

関西浜水会 総会・懇親会 開催



関西浜水会 第19回総会 平成25年10月27日 於 ニューオーサカホテル

来賓 山崎 晃 (12F・浜水会会長)

- 会員 2F 田中 強 2P 舛上英人 5P 吉川五朗
6P 三谷繁尚 7P 東 義人・湯浅 勲
8P 濱田耕一・井上美智代 10E 河野繁喜・
佐々田洋・島内清美・辻岡 茂樹 10 大矢勝
彦・田野 博・井上稔義 11P 森藤須賀子
12P 坂井和夫 13P 大木征二・大畑賢二・河
上征雄・戸田氏懿・藤沢敏子 16F 石橋克
幸・中森 稔 16P 谷口守廣 17P 白川克範
18F 林田和俊 19P 田中裕章・山田恵総
28P 小玉喜子

役員改選

会長 田野 博、名誉顧問 舛上英人、
顧問 三谷繁尚さんが就任されました。

副会長、監事、理事、事務局長、事務局に変更はありません。

※来年度は、20回総会で節目に当たる。参加者が多くなるように考えていきたい。



広島支部
総会・懇親会
が開催されました

日時 平成 25 年 7
月 7 日 (日曜日)
12:00 ~
16:00

場所 ホテルセン
チュリー 21
広島 (広島駅南口)

役員改選

理事 (新任) 前原 正和 (26 F)
顧問 (退任) 中村政一 (5 F)

議題: 平成 24 年度会計・監査・行事報告
質疑応答

総会の案内を出しても返事が来ない場合が増えて
いる。参加者を確保するのが課題である。

広島支部では、61 名の方が会費を振り込んで

懇親会 総会の後、懇親会を開催しました。福岡県
や島根県からも懐かしい顔触れがありました。

参加者

池田速人 (浜田水産高校長) 栗山利男 (福岡・3F)
小林義久 (4F) 中村政一 (5F) 永井敏和 (7F)
佐々木元弘 (8P) 宮脇 勝 (10P) 佐々木博 (10P)
井上範昭 (11P) 岡野岑生 (11F)
山崎晃浜水会会長 (12F) 島田秀男支部長 (15P)
西尾朝雄 (15P) 橋岡茂徳 (福岡・15P)
中村洋一浜水会副会長 (15F) 佐藤 隆 (16P)
河田英司 (16P) 森川孝雄 (17P)
山本周二 (島根・17P) 小川耕次 (17P)
田中輝隆副支部長 (17P) 舛田 隆事務局長 (18P)
水野重敏 (24P) 野崎俊明 (25F) 前原正和 (26F)
山本省三浜水会事務局 (29F)

広島支部総会・懇親会は、毎年 7 月上旬に行ってい
ます。広島在住の方に限りません。久しぶりに広島
に行ってみようか、懐かしい同窓生に会ってみよう
かなどでの参加も大歓迎です。皆様の参加をお待ち
しています。

案内はがきが届かない方で参加希望をされる方は
事務局長の舛田 隆さん (TEL.082-879-7168) に連絡
してください。

松江支部総会・懇親会が開催されました

日時 平成 25 年 11 月 16 日 (土) 15 ~ 18 時 30 分

場所 サンラポー むらくも (松江市殿町)

議題 ・松江支部会則改定

・役員選出

支部長 佐々木宣義

副支部長 牛尾良夫・小川雅道



事務局長 野津享平 事務局補佐 宮崎圭司
会計監事 山田 豊
幹事 松江市内・橋北 宮崎圭司
橋南 佐藤美則
鹿島・島根・美保関 小川周治
婦人部 中村みどり

支部長挨拶

①久しぶりの支部総会が開催でき、尽力いただいた
皆さんに感謝したい。
②今後は少なくとも 2 年毎には総会を開いていき
たい。

参加者

山崎 晃 (12F・浜水会会長)
池田速人 (浜田水産高校校長)
佐々木幸治 (22E・浜水会事務局)
船江昭光 (賛助会員、元職員・体育 S33.4~S46.3)
野村みさ子 (旧姓 青木、賛助会員、元職員・国語
S48.4~S56.3)

会員参加者

小川 久 (1P) 蕪山芳雄 (5F・竹下) 小川次男 (7F)
草本長市 (8P) 佐々木宣義 (10E) 小川雅道 (11F)
牛尾良夫 (11F) 山本英雄 (14E) 小川周治 (15E)
佐藤美則 (16P・上野) 中村みどり (23P 森橋)
野津享平 (26E) 宮崎圭司 (27E)

19期 同窓会を行いました。



平成 25 年 11 月 22 日 (金) 19 期 漁業・機関科
の同窓会を行いました。

向かって左から
 後列 服部憲明(E)、藤田好太郎(E)、岡本政美(F)、
 佐々木繁雄(F)、三明徳七郎(F)
 山本 治(E)、河村修三(F)、木村幸雄(E)
 前列 山本静夫(F)、新家浅夫(E)、中村建市(F)、
 大和道政(F)、川本清一(F)
 の13名が出席しました。
 久しぶりの再会、昔話で盛り上がりました。
 連絡が十分に行き渡らず参加できなかった方もおら
 れると思いますが、又、開催しますので次回にはご
 参加ください。(担当：岡本政美、中村賢市)

38期 同窓会を開催しました。

平成25年4月27日 浜田ステーションホテルで
 38期 同窓会を開催しました。

出席者は、清水謙一先生、秋好和則先生、河上友
 邦先生 山崎晃先生(現同窓会長)、湊裕和(F)、
 高田和博(岡本・E)、齋藤繁則(E)、月輪敏二(E)、
 森田学(E)、上木 譲(E)、下間鉄也(E)、岩本
 充隆(P)、吉川雄三(P)、千代延英信(P)、千代
 延純子(P)、佐々木カツミ(P)、菊池多美子(曾
 根・P)、原田幸徳(E)でした。

十分な案内ができず同期生の皆様には申し訳あり
 ませんでした。次回は学校HPなどでも案内します
 ので多数のご参加をお待ちしています。(原田)



卒業生のコーナー 会員から寄稿いただきました。
 お忙しい中、執筆ありがとうございました。

『狐 火』

三浦智富 (14期 漁業科卒)

狐火という言葉を知ったことはありませんか。狐
 火とは、暗夜、山野に見える怪火、鬼火・燐火等の
 類・狐のちょうちん、等といわれている。

最初に「狐火」を見たのは、私が生まれ育った浜
 田市下府町である。小学校3、4年頃だったと思う
 が夏の祭りで夜神楽があった。当時の神楽は一晚中
 舞っていて舞の最後は「大蛇(おろち)」であった。
 夜中、何時頃かは思い出せないが、一旦家に帰ろう
 とし、ふと「多陀寺(ただじ・初午祭で有名)」の方
 向を見ると、大きな高い松がある(現在は枯れてし
 まって2本ともなくなっている)。その松は山の上に
 顔を出していて「多陀寺松」と言っていた人の人
 は知っていた。その松の上の方に何やら白い光のよ
 うな物がふわふわと浮かんでいるのが見えた。その

松まで、直線距離で約500～600m位であろう。そ
 の時、「おい！あれは火の玉じゃないか？」と言っ
 た記憶がある。自分から見て松の木の左斜め少し上
 方に浮かんでいたのは確かである。昔は火の玉を見
 たとか、狐に騙されたとか実にしやかに親が話しを
 してくれていた。

二回目は、それから十年近くが経った高校3年生
 の時だった。私の家は川の近くで川の反対側が田ん
 ぼと畑でその傍らから山があり山の上には畑があっ
 た。「火の玉」を見た多陀寺松も見えた。畑には桑の
 木があってその桑の実を採って食べたこともある。
 山には小さな山道があったが現在は木に覆われて道
 もなくなったであろう。家は少し高台にあり見晴ら
 しも良く田んぼや山など広く見渡す事ができた。

夏の夕暮れ時で我が家の縁側で母と兄嫁それに私
 の3人で夕涼みをしていた。兄嫁は、最近、万能細
 胞「STAP細胞」を作成した小保方晴子さんが着て
 いて有名になった白のかっぽうを着ていたのを覚
 えている。ある日、かなり暗くなりかけていて、懐
 中電灯のような小さな明かりが1つ山道をおりてく
 るのが見えた。夕涼みをしていた3人で「誰だろう
 か、今頃山から下りてくるなんて」と言いながら見
 ていたら、その小さな懐中電灯のような光は、田ん
 ぼまで来たかと思うと突然走り出した・・・？とに
 かく訳がわからなかった。それも行ったり来たりす
 る動きで人間が走る速さを優に超えていた。しばらく
 その動きを見ていたが、小さな光は突然消えて見え
 なくなった。ついにその正体は分からずじまいで
 ある。

三回目は、専攻科生の時マグロ実習を終え試験勉
 強をしていた時の事、冬の寒い夜であった。夜中の0
 時を過ぎていてトイレに行き外に出てみた。そして
 川上の方を見ると誰かが焚火をしているのが見えた。
 「こんな夜中の、ましてや冬に焚火をするなんて誰
 だろうか」と思って見ていると、赤々と燃える焚火
 のそばの電柱まで見える。焚火までの距離は400～
 500m程度だろうか、はっきりと見えるのである。
 しかし、人間の姿は見えなかった。そして、不思議
 なことに赤々と燃えていた焚火が突然消えたのであ
 る。こんな事ってあるのだろうかと思いつつしば
 らく見ていたが何ら変化もなく、次第に寒気がして
 きて家の中に入った。冬だけではない寒気を感じな
 がら、起きていた母にそのことを話すと「それは狐
 だ」「すぐそばに居ったんで」と言っていた。まさか
 そんなことがあるものかと本気にはしなかった。
 「多陀寺の火の玉」「山道からおりて走り出した光」
 そして「冬の夜の焚き火」。

霊とかは一切信じないが、この3度見た光と火は
 何だったのだろうか？これが昔の俗説の「狐火」か。

その後、船に乗りオーストラリアのダンピアーに
 向かう途中、前部マストに光るセントエルモの火(コ
 ロナ放電)を見たのを最後に現在まで一度もあの一
 うな光を見たことがない。

これ本当の話です、皆さん信じますか。

<p>【注】 セントエルモの火 雷雨の夜などに船のマスト、協会の尖塔、山の頂の先端などに現れる薄青白い炎状の光。</p>	<p>した碧白く光る不気味な氷が、日に日に厚さを増した。アリューシャン列島東部のウニマック海峡を通過してベーリング海に入った。海は相変わらず時化っていて、波しぶきが製材上に間断無く打ち上げて氷っていた。クレーンの直径 30 ミリのワイヤーロープが、着氷で 30 センチにまで太くなり、船体着氷量は、概算で 400~500 トンになった。</p>
<p style="text-align: center;">『教 訓』</p> <p style="text-align: center;">岡本政美 (19 期 漁業科卒)</p> <p>昭和 44 年に漁業科を卒業、同 46 年に専攻科を修了して、外航海運会社、山和商船に就職した。アラスカ航路の製材運搬船三等航海士が、社会人としての船乗りの始まりである。以後、山和商船に 18 年、海上保安庁に 10 年 6 ヶ月、国土交通省大型浚渫兼油回収船「清龍丸」に 11 年在籍して、海港を使用し、守り、造る仕事に携わり、2011 年 3 月、東日本大震災の直後に釜石と大船渡へ救援物資を届けて、海上生活を終えた。それぞれの職場で深い思い出があるが、特に心に残る二つの出来事を紹介する。</p> <p>1. テロ事件</p> <p>昭和 49 年 8 月 30 日金曜日午後 0 時 45 分頃、東京都千代田区丸の内二丁目の三菱重工本社ビル 1 階出入口にあったフラワーポット脇に、赤軍派が置いた時限爆弾が炸裂し、玄関ロビーが大破した。重工ビルに面した近隣ビルのガラスが、爆風によりほぼ全て破壊されて路上に降り注いだ。この爆発で 5 名が即死、3 名が病院収容後に死亡。376 人が高層ビルの窓から降り注ぐ厚いガラスの破片で負傷した。</p> <p>当時私は、三菱重工本社ビル南側斜向かいの、八重洲ビル 8 階にある山和商船海務部で陸上勤務をしていた。昼は近くのビル地下街にある食堂で食事をして、喫茶店に寄って帰るのが日常パターンだった。爆破当日も重工ビル北側の、丸の内ビル地下街で上司と二人で食事をして、帰途、重工ビルの玄関ロビー左手にある喫茶店に立ち寄ったが、あいにく満席で、仕方なく諦めて社に戻った。自分の席に着いて間もなく、強烈な炸裂音と共にビルが揺れた。暫くして、救急車のサイレンやヘリコプターで騒然となった。現場を確認しようと 8 階から 1 階に降りた。ロビーは血にまみれた負傷者でごった返していた。ビルから外に出ようとしたが、窓枠に残ったガラスの破片が間断なく降り落ち、外に出ることができなかった。道路には 30~50 センチの高さにガラス破片が降り積もり不気味な緑色をしていた。</p> <p>あの時、喫茶店が満席でなかったら、今、私は居なかったかもしれない。</p> <p>2. 遭難</p> <p>昭和 57 年 1 月 19 日、千葉港で製材運搬船 J 丸 (10,598 総トン) に一等航海士で乗船した。入社後初乗船した船と 9 年ぶりの再会だった。J 丸は米国アラスカ州南部の港、シトカ、ランゲル、ケチカンで製材を甲板上 7 メートルの高さまで満載して日本に向かった。アラスカ湾、ウニマック海峡、ベーリング海、アッツ島北側を通り千島列島沿いに南下する航海計画だった。アラスカ湾は連日波高 7~8 メートルの大時化だった。出港翌日から着氷し始め、積荷の製材上や船体、デッキクレーン、マストに付着</p>	<p>昭和 57 年 1 月 6 日、遠洋底引き網漁船第 28 あけぼの丸 (549.64 総トン) が、荒天のベーリング海で転覆沈没。乗組員 33 名中 1 名は救助生存したが、8 名死亡、24 人が行方不明になった。およそ一月半後に J 丸がこの沈没地点を通過した。汽笛と鎮魂酒で、衷心より亡くなられた方々のご冥福を祈った。私の前任者は、ご親族がこの海難で亡くなられたため急遽下船となり、私が結婚後の休暇を打ち切って、交代乗船した経緯がある。</p> <p>アリューシャン列島西端のアッツ島北側を通過し、川崎港に向け南下を始めた。2 日前から、カムチャツカ半島南端に居座った低気圧が猛威をふるい、南よりの 10 メートルの大波が左舷側前方から打ち付けて、時折甲板上 7 メートルの製材上部を洗っていた。アッツ島を通過してから約一昼夜後の 2 月 27 日午前 8 時 30 分頃、北緯 51 度東経 166 度付近海域を、西南西に航行していた J 丸は、右舷側正横やや前方を南西の方向に航行している貨物船が、徐々に接近しており衝突の危険を感じ、この船の後方に向けて進路を西にとった。既に、ゆうに 10 メートルを超える高波を左舷側正横から受ける状況になった。</p> <p>この頃、私は 4 時~8 時の航海当直後、船内巡検を終えて自室に戻っていた。まもなく「ズシーン」と五臓六腑に響く横揺れと激震を感じ、船体が武者震いのように揺れ、椅子ごと自室右の壁に打ち付けられた。激震を 3~4 回感じ、船体が大きく右に傾斜したままになった。直ぐ 4 階上の船橋に向かった。傾斜した床の端を踏み、壁と床を手で押して体を支えながら、通常の倍の時間が掛かって操舵室にたどり着いた。</p> <p>船倉上の幅 21 メートル、縦約 22 メートル、高さ 7 メートルに積載した製材が、甲板の両船側に取り付けてあった甲板積貨物移動防止用スタンション (板厚 15 ミリの 30 センチ H 型鋼) 10 本諸共、5 船倉の内 4 船倉で、全体に大きく右に移動し、右舷側は船側から外に 3~4 メートル張り出していた。張り出した製材の上の方に海面があった。船首側の 1 番船倉上の製材は殆ど流失していた。傾斜計の指針は右 30 度~40 度を中央にして振れていた。船の横揺れを減少させるために、左に旋回して、南からの波浪に対して船首を直角に向けたかったが、左旋回は、遠心力が加わり右傾斜を更に大きくして転覆の危険があるため、やむを得ず右に旋回して北に向かい、真船尾から大波を受けて航行した。大波による横揺れはかなり緩和した。固縛用の直径 30 ミリのワイヤーロープが、かろうじて製材が海へ脱落するのを防止していた。あるベテラン甲板手が言った。「わしが行っ</p>

てワイヤーロープを切る。」確かに、ワイヤーロープを切断すれば製材が海に落ち、船体傾斜は復元するだろう。しかし、上に居る人間は、製材諸共荒れ狂う海中に落ちる公算が高い。行かせる訳にはいかなかった。

直ぐ海水タンクの注排水と燃料の移動で、船体傾斜の立て直しを開始した。船体傾斜は緩やかに戻り始め、取り敢えず急場の危険は凌いだ。午後6時頃、可能な限りの海水タンクと燃料タンクの調整を終わった。しかし、船体はまだ右に10~15度傾斜していた。積み荷の製材は右に移動したままだ。とても大時化のなかで180度旋回して、船首を波に向けられる状況ではなかった。うねりと波は益々高さを増し20メートルを超えていた。

地球は高緯度になると東西距離が急速に狭まる。南から北に向かううねりは、地球の狭まりに比例して北へ行くほど高さを増す。カムチャツカ半島南端に中心がある940ヘクトパスカルの低気圧が、3日間停滞して猛威を振るっていた。J丸の海域は、3日間風速30メートルの同じ南の風が吹いていて、うねりをどんどん大きくしていた。気温零下15度、表面水温零下1度、猛吹雪で視界が悪かった。後ろから追い越すうねりの頂で砕ける白波が、雲のように頭上に見えた。操舵室に立つ人の眼高は海面上約20メートル。うねりの頂を遙か上に見た。波高は30メートルになっていた。全長151メートルのJ丸は、うねりの頂から谷間に向けて真っ逆様に突っ込んでいき、また頂に登る。まるでジェットコースターだった。

大時化は治まる様相が無かった。船長は、北緯55度、東経166度にあるソ連(当時)領コマンドル諸島の島影に避難することを決意された。島まではまだ推測250キロメートルあった。当時GPSは無く、時化続きで、太陽や星の高度と方位で船の位置を求める天測ができなかった。ロランなる電波計器も使用不能の海域であった。正確な位置が全く分からないまま北に進んだ。

日付が変わって翌日、28日午前2時頃、レーダーが船首方向約80キロメートルに島影を捉えた。J丸は、後ろからのうねりに押されてどんどん島に接近し、次第に島の全容がはっきりしてきた。運悪く、J丸は東西に長い島の中央に向かっていて、島影の北側に入るために進路を北北東に転じた。右後方からうねりを受けて横揺れが大きくなった。また、製材が移動して危険なため元の進路に戻した。何度か東に西に進路を変えたが、状況は同じだった。島はどんどん近づいていた。船長は、島への任意座礁も選択肢の一つと考えて、会社に電報で、座礁に適した場所を探すよう依頼された。J丸は島の詳しい海図を持っていなかった。会社から電報が来た。「島の遙か沖合は岩礁が多く浅いために、海岸までたどり着く場所が無い。」最後の手段は船を180度旋回させる他になかった。島はどんどん近づいてくるが、暗黒の世界で闇雲に旋回することはできない。舵が効く

限界まで速度を落として時間を稼いだ。午前5時頃、漸く空が白み始め、遠くの波頭が見えるようになった。島から30キロメートルの距離。J丸を旋回させて生き延びる限界の距離だ。

船橋の操舵室には、機関室と通信室当直者以外の乗組員が、退船準備を整えて集まっていた。救命艇、救命筏の降下準備も整った。船長が「これから反転する。賭である。しかし他に助かる道が無い。」旨の説明をされた。最後に杯を交わした。旋回する前に、SOSを打電するよう指示を受けた。通信室に電報を持って行った。若い20歳代前半の通信士は、手が震えてモールスが打てなかった。戦争体験がある通信長は、これで3回目だと言って余裕があった。戦争中に魚雷攻撃を受けた時と、インド洋で貨物船が浸水沈没した時と、過去に2度の遭難の経験者だった。SOSに応答があった。海上保安庁からは、巡視船が救助に向かったが、あまりの荒天のため引き返したとのことだった。ソ連(当時)の貨物船2隻は、救助に急行している。頑張れと励ましてくれた。

大波が来る間隔を見計らって反転体制に入った。が、予期しない大波が襲い断念した。2度3度反転しかけてはやり直し、4度目でやっと反転に成功した。反転中も船体が大波に叩かれて大揺れし、船首が波に向くまでとてつもなく長く感じた。船長は、研ぎ澄まされた神経で襲いかかる大波を見極め、巧みに操舵と速力調節を指示しながら、30メートルの超巨大うねりの中で、見事にJ丸の180度旋回を成し遂げられた。操舵室に拍手が沸き起こった。死の淵からの脱出だった。ふと船長の頭を見た。黒々していた頭髪が真っ白になっていた。防寒着のポケットに、家族の写真と住所氏名を記した紙を入れていた者もいた。万一の時の身元判別用だ。後に、NHKのニュースを見て、保険金を計算した妻もいたと聞いた。

J丸は7日後、全員無事川崎港に入港した。荷役業者が、製材を固縛したワイヤーとチェーンを慎重に緩めた。右側に張り出した製材が、轟音と共に海に落ちた。あの時、甲板手を製材の上に行かせなくてよかったと胸を撫で下ろした。鋼鉄のスタンションが、製材の移動で引き千切られ、デッキから浮き上がっていたが、幸い破口が無かった。もし穴が開いて浸水していたらと思うと背筋が凍った。

反転成功の要因を考えてみた。

第一に、船が大きく右に傾斜した時、右舷側の甲板は海中にあった。甲板の下部はタンクで、タンクの上には通気口がある。通気口も水面下だったが、すべての通気口の逆止弁が正常に作動して、海水がタンク内に浸入するのを防いだ。前の航海中に逆止弁を点検整備していたのが効をなした。

第二に、船体の一部が損傷したが、海水の浸入を招く亀裂や破口が発生しなかった。

第三に、3日間猛威を振るった低気圧が、反転する頃には最盛期を過ぎていて、大きいうねりが来る間隔が長くなり、この間隔をうまく利用できたこと

にある。

当たり前のことだが、船は浸水が無く浮力を維持できれば沈まない。船は強いと感じた。私は二度生死の境界線に立ったが、無事40年の海上生活を終え、現在も健康に生きている。運が良かったとしか言いようが無い。感謝の一言である。

地球上ではテロ事件が頻繁に発生している。この

ところ、日本でのテロは聞かないが、世界がより近くなっている現在、細心の注意が肝要である。まもなく、ソチ五輪の開会式を迎えようとしている。イスラム過激派がテロを計画しているとの情報がある。犠牲者が無く閉会式を迎えられることを切に願うと共に、私の遭難体験談が、少しでも海で活躍される同窓生諸氏の参考になれば幸甚の一語に尽きる。



J丸 航跡図



浜水会 入会式 2月28日

平成25年度 卒業式の前日入会式を行いました。卒業生は51名です。

卒業生を代表して千代延剛太君が『入学以来、浜田水産高校で学んだ自立・敬愛・進取の心を大切にそれぞれの道を歩んで参ります。これからは諸先輩方のご指導、ご助言をいただきながら卒業生としてさらなる伝統を築き、母校の発展のため力を尽くす事を誓います』と宣誓しました。山崎会長より入会が許可され旅立ちが祝福されました。

学校の近況 8月 体験入学 (中学生 70名参加)



マグロ解体



カッター漕艇

東日本大震災からの復興



3年前、3月11日、東日本地震で津波により大きな被害を受けられた青木正紀さん(44年漁業科卒・釜石市・(株)青紀土木)より『震災から3年・・・皆様の御陰で今があります。ありがとうございました』と上の写真入りはがきが届きました。

左上の青い屋根が青紀土木の会社事務所で、がれきに埋もれ全壊状態です。当時の会社HPの写真を拝見すると1階部分は押し寄せた津波に完全に水没していました。5月頃、浜水会から僅かではありましたが支援金を送らせていただきました。社員の皆様が結集されて復興にご苦労された様子がうかがえます。今年3月11日、地震発生時刻に全校生徒で犠牲になられた方々に対し黙祷をささげました。被災地域の早い復興と会社のご発展をお祈りいたします。(事務局)

今年度の進路状況 (学校通信88号から抜粋)

厳しい状況が続いていましたが、昨年度から持ち直した求人数は、本年度も昨年とほぼ同数がありました。しかし県外からの求人、県内からの求人とも数だけを見れば十分ありますが、入社試験の難易度は上がっています。

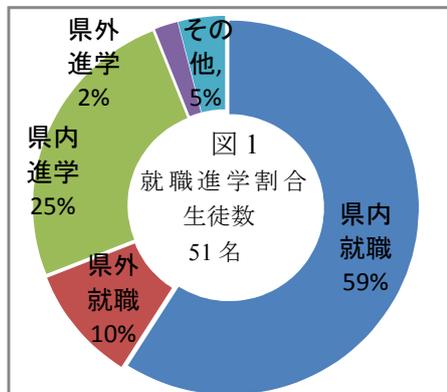


図1は進路状況です。51名の卒業生の内、県内就職が30名(59%)、県外就職が5名(10%)、県内進学が13名(25%)、県外進学1名(2%)、その他が2名(4%)になりました。

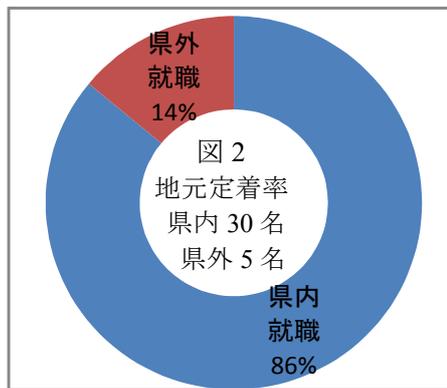


図2は地域別の就職者状況です。地元就職率ともいいますが就職者の内、浜田を中心に県内に就職をする生徒が30名(85.7%)となり地域企業・社会の担い手となって活躍します。県外就職は5名(14.3%)です。

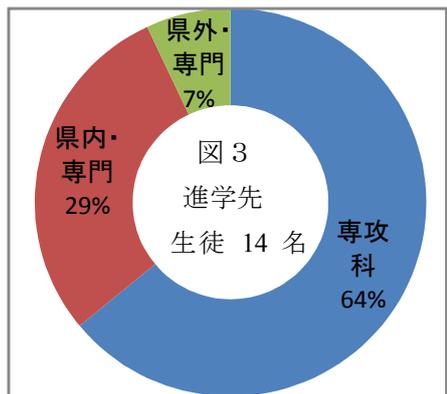


図3は進学状況です。進学者の内、本校専攻科に9名など県内進学が13名、県外への進学が1名となりました。

図4は海洋技術科の就職先です。漁業は、吉勝、裕丸の旋網漁業に3名。祥洋、毛利組、大田通信、石成道路等建設業に4名。シンカー、デルタシーアンドエス、若女食品、ハイレックス島根、島根合板、ベンダ工業(広島)の製造業に6名。その他に西川病院介護職、西部島根医療福祉センター、グリーンガス、タイヨーオート等の介護、販売等へ就職します。

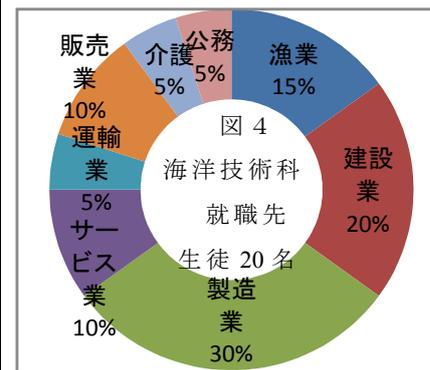


図5は食品流通科の就職先です。マルハマ食品、若女食品、石見食品、福田水産の食品製造業に5名。デルタシーアンドエス3名、オーエムシステム、ホテル玉泉、藤丸(大阪)、むさし(広島)などの販売・サービス業に4名。あさひ苑、水澄み会の介護職に2名等となっています。

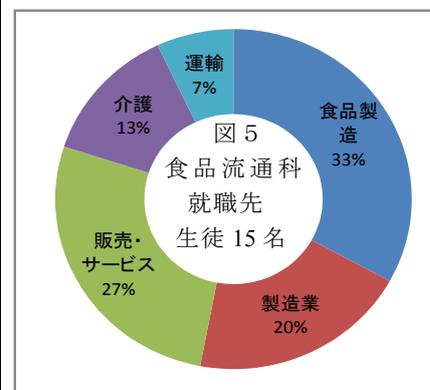
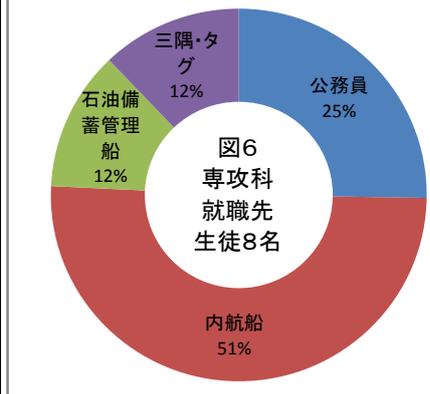


図6は専攻科の就職先です。島根県船舶職員、大島商船高等専門学校練習船の公務に2名。佐藤國汽船、ダイトコーポレーション、神原ロジスティクスの内航海運業に4名、石油備蓄基地管理船に1名、三隅火力発電のタグボートに1名が就職します。



学校の近況



12月8日(日)紺屋町でアンテナショップを行い実習製品販売を実施しました。沢山のお客さんに来場いただきありがとうございました。



1月15日(水)海洋技術科2年生、専攻科1年生がマグロ漁業実習に出港。新造船就航後初の長期航海とあって保護者・地域の皆さんの盛大な見送りを受けました。